

同定に苦慮した *Capnocytophaga canimorsus* による敗血症の一例

◎西野 航平¹⁾、山本 玲奈¹⁾、中村 公亮¹⁾、磯崎 可能子¹⁾、松下 久美子¹⁾、山本 景一²⁾、磯崎 将博¹⁾
一般社団法人 天草郡市医師会立 天草地域医療センター¹⁾、熊本大学病院²⁾

【はじめに】 *Capnocytophaga canimorsus* および *Capnocytophaga cynodegmi* は、主に犬や猫の口腔内常在菌として分離され、咬傷や創傷によりヒトに感染する。今回我々は、同定に苦慮した *C. canimorsus* による敗血症を経験したので報告する。

【症例】患者は65歳男性。発熱、倦怠感、後頭部痛を主訴に近医を受診。来院時、血圧40台と低値を示し、下肢の浮腫と広範囲の紫斑に加え、血液検査では、多臓器不全所見、炎症所見を認め、当院へ紹介、搬送され緊急入院となった。しかし、入院時も血圧低値が持続し、肝腎機能障害や血小板減少を認めたことから血栓性血小板減少性紫斑病（TTP）、播種性血管内凝固症候群（DIC）が疑われ、他病院へ転院となった。

【微生物学的検査】当院で入院時に提出された血液培養2セット4本中、培養開始後12時間で嫌気ボトル2本のみ陽性となり、グラム染色鏡検にて、紡錘状で多形成を示すグラム陰性桿菌が確認された。転院先のVITEK-MSにて *C. canimorsus* と同定されたが、念のため、当院で特

異的プライマーを用いたPCR検査を実施した結果、*C. canimorsus* では陰性、*C. cynodegmi* では陽性を示した。この時点で、質量分析とPCR検査の結果に乖離が生じたため、菌株を国立感染症研究所に送付し遺伝子解析を依頼した。その結果、16SrRNA 遺伝子では、両菌種の相同性が高く鑑別困難であったが、*gyrB* 遺伝子においては、*C. canimorsus* と高い一致率を示した。最終的には当院で用いた特異的プライマーが当たる部位の配列が *C. cynodegmi* の配列と完全に一致する非常に稀な *C. canimorsus* であることが判明した。

【まとめ】今回検出された *C. canimorsus* は *C. cynodegmi* と遺伝学的にかなり近く、生化学性状による鑑別は困難なため、菌種特異的PCR法を実施することは菌種を確定する上で重要である。しかし、遺伝子検査を実施する際は、本症例のように稀な菌種の可能性も考慮し、患者背景や臨床症状と合わせた、より慎重な結果の解釈が必要であると考えらる。

連絡先 0969-24-1111(内線 164)